

執筆者紹介

三上亮 Mikami Ryo

一九五九年生まれ。東京藝術大学美術学部准教授。陶芸家。陶芸。「三上亮 百種千碗展」「三上亮作陶展 くりぬぎの壺」「陶 三上亮展 STAR DUST」

藤原貞朗 Fujihara Sadao

一九六七年生まれ。茨城大学人文社会学部教授。美学・美術史、芸術学。『オリエンタリズムの憂鬱―植民地主義時代のアンコール遺跡の考古学とフランスの東洋学者』『山下清と昭和の美術―「裸の大将」の神話を超えて』(共著)『日本の東洋美術史と瀧精―中国美術史編纂をめぐる国際的・学際的競合』

板倉聖哲 Itakura Masataka

一九六五年生まれ。東京大学東洋文化研究所情報学環教授。中国絵画を中心とした東アジア絵画史。『講座 日本美術史 第2巻 形態の伝承』(編・共著)『描かれた都―開封・杭州・京都・江戸』(共著)『日本美術全集第6巻 東アジアの中の日本美術』

下野健児 Shimono Kenji

一九五六年生まれ。花園大学文学部教授。中国書法史・日本書道史。「祝允明の小楷書法について」「三國・南北朝の書」「書における「手本を写す」ことの意味―臨書と摹書の構造について」

山名伸生 Yamana Shinsai

一九五七年生まれ。京都精華大学文学部教授。日本東洋美術史。『中国の美術―見かた、考えかた』(共著)『日本美術史を学ぶ人のために』(共著)

クレイグ・クルナス Craig Cunas

一九五四年生まれ。オクスフォード大学教授。中国美術。『明代中国の庭園文化』(中野美代子・中島健訳)『図像だらけの中国―明代のヴィジュアル・カルチャー』(武田雅哉訳) *Chinese Painting and its Audiences*

井後尚久 Igo Naohisa

一九六二年生まれ。澄懷堂美術館学芸員。中国書道。『中国書画探訪―関西の収蔵家とそ

の名品』(共著)『昭和三年御大典と山本悌二郎』

鷹巢純 Takasu Jun

一九六五年生まれ。愛知教育大学教育学部教授。仏教絵画史。「悪道の母子―日中における図像と意味内容の変遷」「新知恩院本六道絵の主題について―水陸画としての可能性」(弘川寺本地蔵十王図と水陸画)

王広濤 Wang Guangtao

一九八六年生まれ。復旦大学日本研究センター青年副研究員。日中関係。「日本の戦争賠償問題と対中政策」「中国の対日戦争責任区別論と賠償政策」(日本国際関係学術的研究譜系)

黄英哲 Huang Yin-che

一九五六年生まれ。愛知大学現代中国学部教授。台湾近現代史。台湾文学。『「去日本化」(再中国化)―戦後台湾文化重建(1945-1947)』『漂泊與越境―兩岸文化人的移動』(台湾文化人における「抗日戦争」)

翟猛 Zhai Meng

チューリッヒ大学アジア・東洋学研究院博士
生。中国現代文学。「早期革命文学の革命暴力叙述困境―以陽翰笙の小説創作為例―」「以魯迅為精神資源與本土化研究―讀黃英哲《去日本化》再中國化》」戦後台湾文化重建(1945-1947)」「評社英著《重構文藝机制說》」
文藝範式：上海 1949-1956)

広中一成 Hironaka Issci

一九七八年生まれ。愛知大学国際コミュニケーション学部非常勤講師。中国近現代史。「通州事件」語り継ぐ戦争」「ニセチャイナ」

柴田幹夫 Shibata Mikio

一九五五年生まれ。新潟大学グローバル教育センター准教授。東洋史。「興亜揚佛―大谷光瑞與西本願寺の海外事業」『大谷光瑞の研究』『大谷光瑞とアジア―知られざるアジア主義者の軌跡』

原田忠直 Harata Tadanoo

一九六三年生まれ。日本福祉大学経済学部准

教授。中国経済論。「現代中国における「包」と「発展のシェーマ」についての一考察」「農民工からみた中国社会―ある一枚の写真から読み解く中国社会」(柏中観と「包」の倫理規律)」

二好章 Miyoshi Akira

一九五二年生まれ。愛知大学現代中国学部教授。中国近代史・中華人民共和国教育史。「摩察と合作 新四軍 1937-1941」『叙事詩の時代の抒情』(翻訳)「根岸佑著作集」全五巻(編、刊行中)

木島史雄 Kishima Fumio

一九六〇年生まれ。愛知大学現代中国学部准教授。中国中世美術史。「パレルゴン操作による鑑賞の楽しみ―伏生授經圖受容の研究(その二)」「伏生授經圖受容の研究」伏生授經圖受容の研究―鑑賞者は繪畫作品をいかに楽しんでか―タイトル・主題・著録篇

翻訳者紹介

石田卓生 Ishida Takuo

一九七三年生まれ。愛知大学東亜同文書院大学院記念センター研究員。近現代日中関係史・

中国語教育史。「日清貿易研究所の教育について」『東亜同文書院の中国語文章語教育について』(東亜同文書院の北京移転構想について)

学会通信

◎学会員活動(二〇一七年四月～二〇一七年一〇月) 加治広基

「中国の国連平和維持活動」(進藤榮一・木村朗編『東アジアの不戦共同体と中国・北朝鮮脅威論の超克』耕文社、二〇一七年一〇月)

「日中平和学対話の成果、これからの課題」(学会報告、日本平和学会春季全国大会、二〇一七年七月一日)

川村亜樹

「ポスト人種主義とヒップホップ」(研究発表、第一回アメリカ学会年次大会、部会D「ヒップホップにみる人種の混淆」於早稲田大学、二〇一七年六月四日)

[Jonathan Franzen の *Parity* における過剰な核] (研究発表、第三〇回エロクリティシズム研究会、シンポジウム「核とポストモダン文学」於サテライトキャンパスひろしま、二〇一七年八月五日)

黄英哲

散文集『櫻花・流水―我的東瀛筆記』（台北・允晨出版社、二〇一七年四月）

『興民』と小説の位置づけ―許寿裳遺稿

『中国小説史』初探（松岡正子・黄英哲・梁海・張学昕編『歴史と記憶―文学と記録の起点を考える』あるむ、二〇一七年一〇月）

唐燕霞

『グローバリゼーションと格差社会の形成―日中社会構造の類似性と異質性』（高橋五郎編著『新次元の日中関係』日本評論社、二〇一七年九月）

松岡正子

「チャン族における婚姻慣習の記憶―史詩『木吉珠和斗安珠』と入贅婚」（松岡正子・黄英哲・梁海・張学昕編『歴史と記憶―文学と記録の起点を考える』あるむ、二〇一七年一〇月）

三好章

「歴史の視点から見た中国の対外観」序論（松岡正子・黄英哲・梁海・張学昕編『歴史と記憶―文学と記録の起点を考える』あるむ、二〇一七年一〇月）

中国21 Vol.48 予告(18年3月刊行予定)

特集●いまさら文革、いまなお文革、いまこそ文革

中国の街角で、文化大革命期のような「雷鋒に学べ!」のスローガンやポスターをしばしば目にするようになった。また、文革の悲劇が繰り返されるのか、その可能性は本当にないと言いきれるのか。

文革の起点をどこに置くにせよ、すでに半世紀以上の時間がたつてしまったいま、文革を見直す必要があるのではないだろうか。現実に行進する習近平体制は、文革とはたして無縁の存在なのか。文革は、中華人民共和国の歴史、いや伝統中国を踏まえて、中国にとって特殊な出来事であったとしてしまつてよいのだろうか。

この特集では、多方面から文革を考え直すことを目的としている。そこには、文革へのこれまでの見方への批判的考察がある。すでに明らかになされてきた暴力を、さらに露呈するものがある。また、これまでは重視されてこなかった事象をとりあげている。さらに、大陸中国の周辺からの視角も提供している。そして、凝縮された表現のなかに、単なる悲劇に止まらない文革の不条理を、視覚を通して訴える作品も収録する。それらを通じて、文革が必ずしも一九六〇年代半ばからの十年間という限られた時間内での特異な現象であつたわけではないこと、伝統中国につらなる社会的文化的な底流があつたこと、そして特殊事情としては冷戦期のなかの中ソ対立という国際環境が密接にかかわつていたことなどが明らかにされる。

【対談】加々美光行×小島麗逸

【論説】石井知章、加藤徹、川島真、金野純、坂井田夕起子、松谷暉介、松本ますみ、水谷尚子ほか

【コラム】高口康太

【漫画】辣椒

編集後記——ビッグデータやAIという言葉が聞かれるようになってきた。暗算や筆算を肩代わりする電子卓上計算機の時代からすれば大きな様変わりである。処理速度や容量の進歩だけでなく、近時の大きな変化は、その向かう方向にある。つまり手順を踏めば誰がやっても確実に同じ結論が出る論理命題処理から、何かしら曖昧な要素を含む処理へと向かっている。「データベースは結論を出せない」、つまり世界が、辞書的コトバと数字の処理だけでは把握できないことに、世界が気づき始めているように見える。この方向の行きつく先は当然、「芸術」であろう。こんな漠然とした思いをお話したところ、皆さん執筆依頼を受けてくださった。思いを共有してくださっていたゆえであらうと思う。また中国古典美術が、その本来の力と魅力に比して低い評価しか与えられていないという思いも、共感していた。私は美術史を専攻するものではないが、それゆえに皆さんにわがままなお願いをすることもできた、ありがたいことである。加えて、翻訳転載をお許しくださったオクスフォード大学のクレイグ・クルナス教授とオクスフォード・ユニバーシティ・プレスにも感謝を申し上げる。クルナス教授には積極的な趣旨賛同のこともいただいた。かつて文化圏を共有していた隣国のわれわれだけでなく、西洋の人々にも中国古典美術の魅力が理解されていることは、心強い。様々な意味で、中国古典美術鑑賞と支持の伝統が途絶えていないことを感じることができた。輿論の反応に期待したい。

(木島史雄)

投稿原稿募集 新しい発想から現代中国をめぐる諸問題に切り込む、気鋭の論考を広く募集します。現代中国に関するテーマであればジャンルは問いません。むしろ、既存の学問のジャンルを打ち破るような斬新な発想を期待します。①未発表のものに限る ②論説、研究ノート、報告・ルポ、資料等=50枚程度、書評=20枚程度、エッセイ=10枚程度(400字詰原稿用紙換算) ③ワープロソフトで作成した原稿の打ち出し2部およびデジタルデータを提出。デジタルデータはeメールでの送信も可。

〈原稿送付先〉愛知大学現代中国学会 E-mail : china21@ml.aichi-u.ac.jp

投稿規程の詳細は現代中国学会までお問い合わせ下さい。採否は編集委員会の検討を経て決定し、採用にあたっては規定により薄謝を進呈します。なお、応募された原稿は採否にかかわらず返却いたしません。

中国21編集委員会

〔編集長〕松岡正子 加治宏基 木島史雄 黄英哲 高橋五郎 三好章

愛知大学現代中国学部 <http://www.aichi-u.ac.jp/college/chi.html>

中国21 Vol.47

特集 中国古典美術の魅力
——21世紀からの視線

2018年1月31日発行

ISBN 978-4-497-21808-7 C3071

編集 愛知大学現代中国学会
名古屋市中村区平池町4-60-6 〒453-8777
Tel. 052-564-6128 Fax. 052-564-6228

発行人 安部 悟

発売元 株式会社 東方書店
東京都千代田区神田神保町1-3 Tel. 03-3294-1001

制作印刷 株式会社 あるむ
名古屋市中区千代田3-1-12 Tel. 052-332-0861